

雑 報 欄

553.55:550.8(521.22):622.19

茨城県大平田石灰石鉱山調査報告

茨城県庁の依頼による調査。同県多賀郡多賀町大平田にあり、常磐線多賀駅西方約6km、トラックを通ず。石灰石の搬出は索道4km、軌道1kmで日立駅前の常陸セメント工場に直送される。

地質は古生層鮎川統下部で、粘板岩・珪質緑色千枚岩・黒雲母千枚岩・角閃岩および石灰岩よりなる。走向N20°W傾斜40°Eを示す。

鉱床は谷をへだてて南北2個の鉱体にわけられ、おの

の走向延長300m、厚さ平均50m、傾斜延長250mのレンズをなす(現在北鉱体のみ稼行中)。石灰炭は、白色糖状で、結晶は1mm以下、純度比較的高く、地質調査所の分析によれば、ほとんどすべての鉱石は、CaOは3~55%、MgOは0.15~0.35%の範囲に入り、P₂O₅は0.003%以下である。

鉱量は計約1千万t.と推定される。

(昭和26年10月調査) (安齋俊男)

553.612:553.57:550.8(521.22):622.19

茨城県小田村カオリン・珪石鉱床概査報告

茨城県庁の依頼による調査。真壁郡紫尾村附近には土管・カマド等の製造工場が多く、これらは土地の粘土を単味使用している。小田村のカオリンをこれに混入して、やや高度の陶器類の製造に役立たせるためその性質・鉱量等を調査するのが目的であった。

鉱床は茨城県筑波郡小田村小和田にあり、筑波鉄道北條駅または小田駅より2km、車馬を通ず。

地質は粗粒雨雲母花崗岩よりなり、北および東方は黒雲母片岩と接している。

鉱床は花崗岩北縁に発達するペグマタイト質石英脈およびアプライトで2個のレンズ状鉱床が南北に連なる。

南鉱体は走向N10°W、傾斜70°E、延長70m、厚さ南端で9m、北端で1mあり、その一部がカオリン化している。北鉱体は、走向N10°W、傾斜70°W、延長30m、厚さ9mであり、上盤側のアプライトに沿った部分にカオリン化が認められる。

鉱石は、フェロシリコン・人造珪砂に適する2級品程度の珪石と、陶器素地に混入することの可能と思われるカオリンを産す。

鉱量珪石計約7,000t、カオリン計約500tと推定される。

(昭和29年10月調査) (安齋俊男・下村仁作)

553.41:550.8(521.22):622.19

茨城県生里鉱山含金硫砒鉄鉱床論査報告

本鉱山は茨城県久慈郡小里村にある。附近の含金硫砒鉄鉱は比較的劣勢なるため従来開発は行はれていない。

地質は竹貫統、片麻岩類およびこれを貫ぬく花崗岩類を基盤とし、これらの上部に不整合に発達する第三紀礫岩、砂岩および玄武岩類よりなる。

鉱床は基盤の片麻岩類、花崗岩類に胚胎する含金硫砒鉄鉱石英脈で、NSまたはENの2系統の裂隙に充填する網状鉱床である。

鍾巾は最大10cm程度、普通数cmの鉱脈にして、鉱

脈が非常に細脈となり、網状となる場合には鉱染状の鉱床?を形成する。

自然金は硫砒鉄鉱中に含有されるものが多いが、他の閃亜鉛鉱、方鉛鉱等の硫化物にも随伴する。

鉱床露頭は数ヶ所にあり、その主なるものは溝沢坑にして、走向N80°W走向延長30m+、鍾巾10cm、含金品位、数g/tを示し、高品位部は数10g/tを示す。

母岩の変質程度は一般に弱い、鉱染部ではその周囲が著しく青色粘土化せる部分がある。

鉱石を構成する鉱物は自然金、硫砒鉄鉱、方鉛鉱、閃

亜鉛鉱、微量の輝銅鉱、黄銅鉱にして、脈石として石英、方解石を随伴する。

現況は滝沢坑において30m内外探鉱している外、十分な探鉱は行われていない。

553.435:550.8(521.22):622.19

茨城県久慈鉱山含銅硫化鉄鉱床調査報告

昭和26年11月約1週間茨城県久慈郡河内村にあり、かつて金山として稼行したことの久慈鉱山の含銅硫化鉄鉱床を概査した。調査した黒礫および昌栄の両鉱はいずれも古生代の緑色変岩層中に胚胎し、一部は破碎を受けている。昌栄鉱床は角礫帯中に胚胎し、走向N20°E~NS、傾斜80°W、巾1~2mで、角礫状の鉱塊が認められる。黒礫鉱床は第1鉱床および第2鉱床よりなり、母岩は珪化および絹雲母化を受け、走向N10°W、傾斜80°W、規模は延長20~40m、巾1~2mである。黒礫坑において第一鉱床に着鉱し、鑛巾5mに達するが、走向N10°Wの粘土脈および絹雲母脈により寸

結論として、鉄脈はEW系のものが、優勢であり、かつ、脈の性質も良いのでこの傾向の鉄脈に対する探鉱が望まれる。

(昭和26年10月調査)

(高島 清・徳蔵 勝治)

断される。鉄石は黄鉄鉱・黄銅鉱・閃亜鉛鉱および方鉛鉱・自然金等よりなる。昌栄鉱床に関しては2号坑内において南鑛押を進め、黒礫鉱床に関しては黒礫坑内において南北両鑛押および西押を行うべきものと思うが、後者の探鉱結果によつては有望視されるものと思う。附近の地質構造複雑で、鉄床の賦存状況判然とせず、探鉱困難であるから、まとまつた鉄床の存在を確めるため、域内全搬にわたり地表および坑内精査を行い、鉄量の増加を計るべきである。

(昭和26年11月調査)

(宮本 弘道・時津 孝人)

553.44:550.8(521.43):622.19

石川県九谷鉱山亜鉛鉄床調査報告

昭和26年7月から8月にわたり約3週間石川県江沼郡西谷村九谷鉱山の亜鉛鉄床を調査した。

本鉄床は飛騨片麻岩類の1部に夾在する結晶質石灰岩の交代した接触交代型亜鉛鉄床に属する。鉄体はスカロン(主にヘデンベルク輝石、綠簾石)および石灰岩中に胚胎し、脈幅0.5~1.0mの鉄脈の集合よりなる径数m³位の塊状鉄体、各脈は礫岩の構造に平行する。富鉄体は玢岩脈に囲まれたとき空間に多く存在する。

鉄石は鉄分に富む閃亜鉛鉄を主とし、局部的に黄銅鉱、方鉛鉱の密集する所がある。随伴鉄物はヘデンベルク輝石・ペラ輝石・綠簾石・柘榴石・珪灰石・方解石等である。

品位は亜鉛平均5~10%、銅0.5~1.0%、鉄量は1鉄体数100t程度のものが散在するので算定困難であるが、概略確定、推定約3,000tと見込まれる。

(昭和26年7月調査) (林 昇一郎・時津 孝人)